

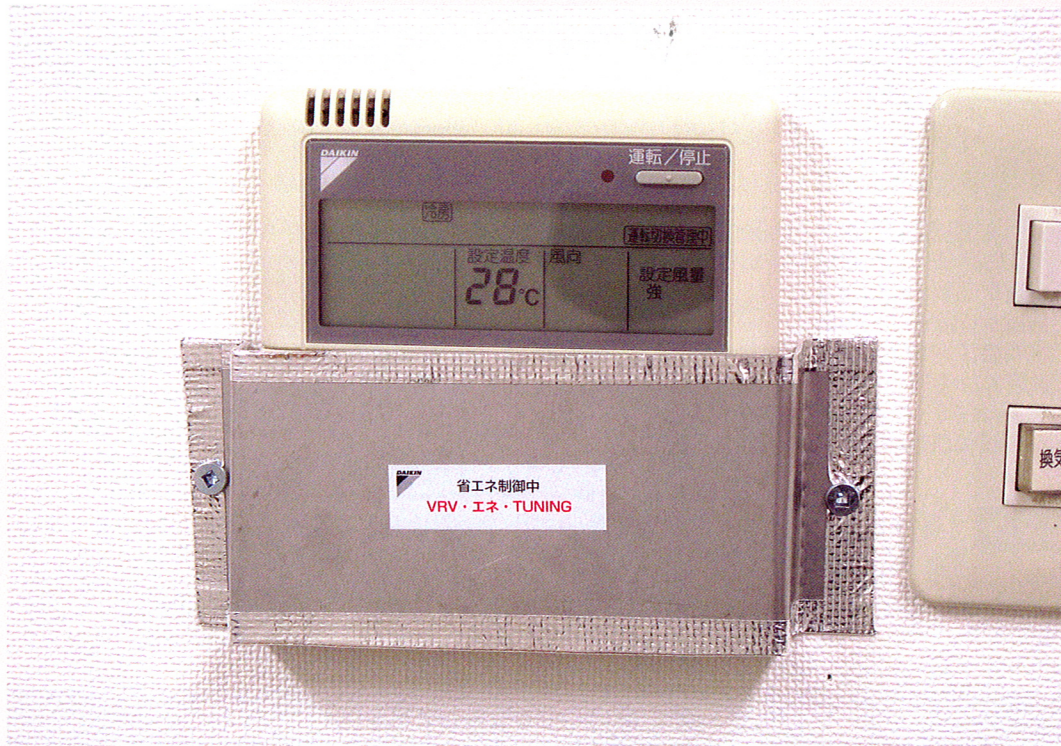
医療タイムス

週刊医療界レポート

2011.7/18 No.2020

特集

医療機関と節電 取り組み可能な実例を探る



タイムスインタビュー

政策の推進に患者が参画
がんと共生する社会を目指して

特定非営利活動法人グループ・ネクサス理事長

天野慎介氏

グラフ北から南から No.249

独立行政法人国立病院機構

災害医療センター

(東京都立川市)

冬の時代の診療所経営

地域での出前講演会

下町を歩いていると顔見知りの患者さんに呼び止められる。路上での無料相談に応じる。それを見つけた別の患者さんがまた寄って来て、ご家族の病気について聞いてくる。忙しければ快く付き合うが、急ぎの時は下を向いて走り抜ける。だから地元ではおちおち買い物はできない診療所経営者も多いだろう。路上で相談会をやるくらいならと、10人程度が集まって、広めの患者さん宅で「認知症」をテーマにしたミニ講演会の講師に招かれた。思いのほか好評だった。患者ではない近所の高齢者も聞きに来られた。こうして頼まれるままに地域での「出前講演会」を何度も繰り返してきた。クリニックの会議室でやることもあるが、地域の民家や公民館で行うこともある。数えきれないほどやって来た出前講演会は、一人前の町医者になるための自分を鍛えてくれた。下町には、自分の知らない世界がたくさんあった。何よりも患者さんの本音が聞けた。サッカーに例えるなら、ホームではなくアウェーの試合だ。病院や診療所の外来は、常にホームだ。しかしアウェーで闘ってこそ本当に強くなるのだ。

いつしかそれが大きくなって市民フォーラムに発展した。一時は、キャパ650人の会場を満員にして行った。しかし準備が大変なので、最近はキャパ150人規模と定めた市民公開講座を年数回開いている。自院主催の出前講座のいいところは、気を使うこともなく自由自在にできることだ。好きなゲストも呼べる。地域へのささやかな恩返しとしてのボランティア活動と位置付けている。最近は校医をしている高校でも定期的に行っている。

6～7月は、東日本大震災での活動報告会を何度か行った。意外にも高齢者たちが大変興味を持ってくれた。被災地に行けない人のほうがむしろ関心が高い印



医療法人社団裕和会理事長
長尾クリニック院長 **長尾 和宏**

1958年香川県生まれ。東京医科大学卒業。尼崎市医師会地域医療連携・勤務医委員会委員長。尼崎市医師会内科医会前会長。医学博士。著書「町医者力」「パンドラの箱を開けよう」(エピック)「在宅療養を支えるすべての人へ」(共著、健康と良い友だち社)など
HP <http://www.nagaoclinic.or.jp>
ブログ <http://www.nagaoclinic.or.jp/doctorblog/nagao/>

象だった。義援金もたくさん集まり、相馬市の震災孤児支援基金にお届けした。報告会の感想文には、「関西がいかにか幸せか、自分がいかにか恵まれているかよく分かった」と書いてあった。裏仕事を手伝ってくれたのは多くのボランティアさん。遠くから手伝いや参加してくれた人もいた。在宅医療が多職種連携なら、出前講座も知人や友人などとの多職種連携で行っている。

出前講座が診療所経営に役に立っているのかどうか、正直実感はないし、計りようがない。しかし、経営に不利になる要素はあまりないのではないかな。病院にはできない世界だろう。診療所経営者の醍醐味だと思っている。だから地域の老人会、町内会、ボランティア団体などから出前講座のお声がかかって、断ったことがない。ある老人会では会長自らが「みんな介護保険とやらにお世話にならんよう、毎日体操をしてピンピンコロリを目指そう！」と檄を飛ばしていた。素晴らしい「演説」だった。蛇足だが、東北地方の高齢者も皆同じようなことを言っていた。診療所は地域とともに歩むもの。だから最優先で引き受けている。開業医はどこまで行っても「地域」との関係性を最大限に考慮すべきだろう。夏祭りや町の行事こそ積極的に参加すべきだろう。さらに「ホームからアウェー」という例えは、まさに「病院から在宅」という動きとの類似性を感じる。出前講座は本当に面白い。